

④ 自然教育園における繁殖鳥の状況

川内 博*・大塚 豊**・丹羽和夫**・川内桂子*

The situation of the breeding bird in the Institute for Nature Study, Tokyo

Hiroshi Kawachi*, Yutaka Otsuka**, Kazuo Niwa**, Keiko Kawachi*

はじめに

自然教育園では、開園時以来、継続的な鳥類調査が実施され、その結果が公表されているため、東京都心部での鳥相の推移を知ることができる。その調査を継続するため、2012年11月から定期的に実地踏査を行い、1年目には冬季の状況を本報に報告した。昨年度は繁殖期におけるシジュウカラのテリトリー調査を実施し、その結果を発表し、本園のガイドブックにも掲載されている（自然教育園編、2014）。

今年度は、園内での繁殖状況について注目し調査を行った。途中段階であるが、本園における過去の調査結果を土台に現状を報告する。

自然教育園での鳥類の生息については、開園の1949（昭和24）年からの状況が年代を追って残されている。今回は本報に所収されている調査報告をもとに、繁殖もしくは繁殖の可能性がある鳥、過去に繁殖記録のある鳥、今後の繁殖に注目している鳥に注目して、近況をまとめてみた。

なお、鳥類の配列順序は『日本鳥類目録改訂第7版』（日本鳥学会、2012）に準拠した。

調査方法

本調査は、2012年11月～2015年3月の間に、月1回以上の実地調査を行い、状況を把握した。また、これまで発行された自然教育園報告の中から、生息・繁殖に関わる記載を収集し採録し、繁殖状況の推移を調べた。

その上で重要度を考え、1. 繁殖確認もしくは繁殖の可能性が高い鳥、2. 過去に繁殖記録のある鳥、3. 今後の繁殖に注目している鳥にグループ分けをして、それぞれの鳥について、東京都での生息状況、自然教育園での過去の状況、そして本調査中の状況および今後の調査について記載した。

*都市鳥研究会, Urban-Bird Society of Japan

**日本野鳥の会東京, Tokyo Chapter Wild Bird Society of Japan

調 査 結 果

1. 本園で繁殖確認もしくは繁殖している可能性が高い鳥：6目10科11種

(1) オシドリ〔カモ目カモ科〕

本種は東京23区や平地部の池に少数飛来する冬鳥であるが、皇居、赤坂御用地、小石川後楽園などでの巣箱営巣や自然繁殖が記録されている（東京都，1974）。

本園はかつて“オシドリの名所”として知られ、1960年代までは秋冬期に定期的に多数飛来し、ひょうたん池や水生植物教材園（現水生植物園）の池に、9月ごろから翌年5月頃まで生息していた〔最大羽数：1964年11月27日158羽（120♂・38♀：）〕（千羽，1978）。

1970年代半ばごろから減少傾向がみられ、1985年12月1日に70羽、1990年代には10羽程度の飛来となっている（日本野鳥の会東京支部研究部・未発表）。

本園では、1996年6月27日に、水生植物園の池で親鳥1羽とヒナ8羽が発見された。また翌年1997年5月28日にも同池で親鳥1羽とヒナ6羽が、さらに1998年4月29日に、親鳥1羽とヒナ4羽が観察された。巣は見つかっていないが、水辺近くで樹洞営巣する本種の繁殖生態から、園内で繁殖したことは間違いないと考えられる。上記の記録は、今回、自然教育園主任の大澤陽一郎氏から提供された観察記録から抜粋したもので、この件については今後さらに調べたうえで詳細を報告したい。

本調査期間中は、オシドリの生息は記録されなかった。また、2013年中に277回本園を訪れ、野鳥の写真撮影された報告のリストにもオシドリの記録がない（渡邊，2014）。

当地における本種の繁殖は、前述のように1990年代後半に3年連続営巣した実績がある。今後も可能性があると考えられるので、他所の事例も併せて注視していきたい。

(2) カルガモ〔カモ目カモ科〕

本種は東京都内全域の川・湖・池・海岸などの水系に生息し、繁殖している留鳥で、1980年代からは、都心の人工池やデパートの屋上など繁殖するなど、都市鳥化が著しい水鳥である（川内，1997）。

本園では、1970年頃までは生息が稀で、不規則に出現し、安定していないとされていた。1973年頃からは、ひょうたん池やいもり池に2～5羽程度がしばしば飛来し、1980年代には滞留期間も長くなり、なかには周年生息する番いも出現するようになった（千羽，1978）。1991年5月～7月にかけては、水生植物園で営巣し、ヒナ7羽が誕生し、そのうち2羽が巣立っている（千羽・坂本，1992）。その後もしばしば営巣活動は見られているが、ヒナがノネコ・ハシブトガラス・サギ類・アオダイショウなどの外敵に襲われて、巣立ちにまでいたらず、繁殖に成功していないようである。

本調査期間中も、ひょうたん池、水鳥の沼、いもりの池、湿地、水生植物園の池などでときどき見かけた。2013年5月～6月にかけては、水生植物園で1番いが営巣し、ヒナ11羽が産まれた。しかし、日が経つにつれて徐々にヒナの数が減り、6月5日には1羽も観察されなくなり、巣立ちにはいたらなかった（岩出，2014）。

都市の自然環境下でのこの鳥の繁殖実態について、本園を事例として調査研究を進めていきたい。

(3) カイツブリ [カイツブリ目カイツブリ科]

本種は東京都内の池・川・湿地などで、留鳥として繁殖している水鳥である。

本園での生息は、開園当初から1970年代までは知られていず、1980年4月～6月にかけて、水生植物教材園（現水生植物園）の池で営巣し、3羽のヒナが巣から出て泳ぎだしたというのが初記録である（千羽・坂本，1981）。生息を始めたきっかけは、その前年夏に水生植物教材園の泥が浚渫され、開水面が広がったためではないかと考えられている。

同池での繁殖は、その後1982年まで3年連続で見られたが、1984～1987年までは記録されず、1988年に再飛来し繁殖している（千羽・坂本，1989）。以後1991年まで毎年1番いが営巣し、3～5羽のヒナが確認されている。

その後の状況は不明だったが、今回自然教育園主任の大澤陽一郎氏から詳細な観察記録が提供された。それによると1995年～1998年まで繁殖し、1～4羽のヒナが確認されている。2000年にも営巣したが、途中で放棄。2002年にはヒナ3羽、2003年には2番が営巣し、4羽が巣立っている。営巣場所はいずれも水生植物園の池で、1996年からは、繁殖時には営巣場所近くの通路を閉鎖して保護している。その後2004年～2008年の間、本園でのカイツブリの繁殖は観察されていない。

本調査期間中では、2013年7月上旬から水生植物園の池に姿が見られるようになり、7月11日に巣と卵が発見された。園では営巣場所に近い道に「水生植物園で9年ぶりに繁殖中」という看板が掲示され、通行を止めて営巣を保護した。大澤氏の観察によると、8月1日～7日にかけてヒナ5羽が孵化し、育雛が見られた。10月3日に親鳥1羽ヒナ2羽が確認された後、姿が見られなくなった。

当地における本種の繁殖は、1980年代以降、断続的だが継続されているということになる。近年、日本におけるこの鳥の繁殖状況が悪化していることが問題となっている。本園での営巣が継続されるような工夫・研究が大事だと思われる。

(4) キジバト [ハト目ハト科]

本種は第二次世界大戦後の1950年代には、東京都心部では、人を恐れ、ごくまれに見かける冬鳥とされてきた。空気銃の使用禁止などが進むと徐々に人前に出てきて、都内全域に留鳥として生息するようになった経歴がある（川内，1997）。

本園では、1960年代に徐々に定着するようになり、営巣も確認され、留鳥となった。1970年代には個体数が増加し、センサス調査でも1960年代半ばでは2～3羽だったのが、1970年代半ばには10～12羽と増加し、人を恐れなくなってきた（千羽，1978）。また、1990年頃からは、夕方になると園外からねぐらとして利用する個体が飛来するようになった（千羽・坂本，1992）。

本調査期間中は、年間を通して、園内全域にふつうに生息している。営巣は、古巣をふくめて発見していないが、幼鳥羽の残る個体も見ていたので、園内もしくは近隣で繁殖していると考えられる。樹上の枝に皿形の巣を造り繁殖する鳥で、園内に多数生息するハシブトガラスに営巣を妨害されることが多いと思われる。今後、園内での繁殖の有無を確認したい。

(5) カワセミ [ブッポウソウ目カワセミ科]

本種はかつて東京都内の水辺に広く分布し、留鳥として生息し繁殖していたが、1960年代半ばを最後に23区では姿が見られなくなった。しかし、1980年代から各地でその生息が復活し、最近では以前より頻繁に見かけるような状態になっている（川内，2008）。



写真1 自然教育園のシンボル・カワセミ

2015年1月11日 水生植物園の池にて〔撮影：川内 博〕

本園では、1949年の開園時から園内の水辺に生息し、1960年時の調査ではひょうたん池などで常に出現していたが、1964年時の調査時には稀な出現種となっている（千羽，1978）。原因としては本園に隣接して建設された高速道路（高速2号目黒線）の工事に伴う影響と考えられた。その後単発的に水辺で生息が観察されていたが定着はしなかった（千羽・坂本，1985）。しかし、1988年に、一般の入園者が入れない建物跡地に掘られた、園内で生じる残材（おもに枯木・枯枝・枯草）を焼却・堆積するための穴（現カワセミ池）の壁面に横穴を掘り営巣し、同一番いが2回繁殖した。また、翌年も同地で2回繁殖した（矢野，1990）。その後も1993～95年・2000年・2008年・2009年に営巣し、21年間において12回の繁殖活動をして、55羽のヒナの巣立ちが確認されている（矢野，2009）。その後は単発的な飛来だけで営巣は見られていない。

本調査期間中、秋冬期に何回もカワセミの姿を目撃した〔写真1〕。また、2013年4月にはカワセミ池に雄個体が飛来したとのことで、付近への立入り禁止処置がとられた。しかし、期間中には繁殖活動は見られなかった。

本園では2004年から2005年にかけて、水鳥の沼・ひょうたん池・水生植物園の池の浚渫やいもりの池の掻い掘りなどが実施され、ブルーギル・オオクチバスなどの外来種が駆逐された（矢野他，2005）。水辺において、在来種による生態系が再構築されれば、園内での継続的な繁殖が復活すると思われる。東京都心部の重要な営巣地として、今後の状況も追跡していきたい。

(6) コゲラ〔キツツキ目キツツキ科〕

本種は日本最小のキツツキで、全国に留鳥としてふつうに生息し、東京でも奥多摩～多摩・狭山丘陵などには以前から分布していたが、平地部の多摩地区や23区ではまったく生息していなかった。それが1980年代半ばに、各地の緑地に一斉に生息するようになり、繁殖もするようになった（川内，

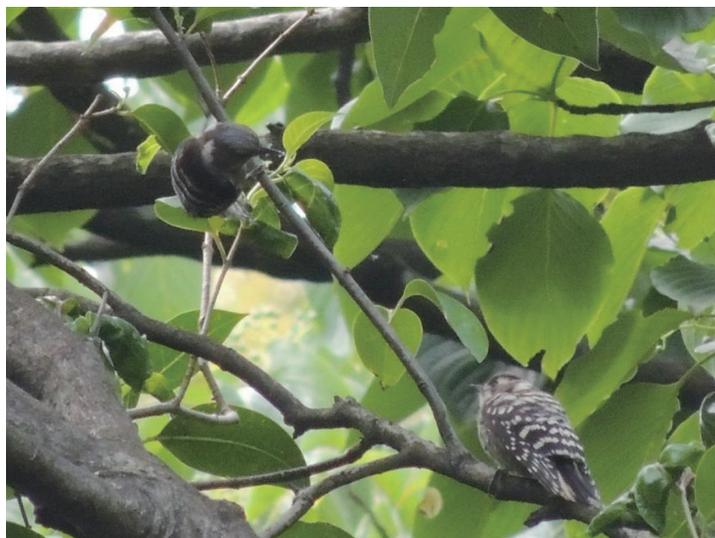


写真2 ヒナ連れのコゲラ（右下が巣立ちビナ）

2014年5月24日 いもり池の近くにて〔撮影：川内 博〕

1997)。

本園でのキツキ類の記録は、かつてはアカゲラ・アオゲラ・アリスイのみで、コゲラはなかった。本種は1986年6月頃から突然出現するようになり、1990年には繁殖も確認された（千羽・坂本、1992）。その後1990年代後には3～5番い程度が園内で繁殖しているとされている（武藤、2001）。筆者も2000年代に巣穴掘り行動などを観察している。

本調査期間中に営巣自体は見かけなかったが、巣立ちビナを連れた家族群を3か所で見かけた〔写真2〕。また、本種は枯木・枯枝に巣穴を掘り、営巣するという特徴を持っているが、園内で巣穴を何か所も認めた。

園内の樹木の過熟・高齢化が進んでいるため、今後も枯木・枯枝は増え続ける状態なので、本種の繁殖は現状で継続されると思われる。

(7) ハシブトガラス〔スズメ目カラス科〕

本種は東京都区内に多数生息する留鳥で、「生ごみの食い荒し」「繁殖期に人への攻撃」などで社会問題を生じさせている。本園はカラスの集団ねぐらのひとつとなっているとともに、日中も多数の滞留する個体が出て、園内の動物への脅威ともなっている。

本園では、1970年代からねぐらに集まる個体数が増加し、1964年12月には250羽、1974年12月には500羽以上、1980年1月には850羽、1981年には1,000羽以上が就峙していると推定され、また日中でも120～150羽は園内に残るとされている（小原・坂本・千羽、1982）。その後の就峙個体数調査によると、1995年12月3,771羽、1998年12月6,574羽、2000年12月4,819羽、2002年11月4,091羽、2004年1月3,580羽となっている。

繁殖に関わるものとしては、日中に滞留している個体数〔残留個体数〕は1997年6月127羽（3,002

羽), 1999年7月123羽(3,748羽), 2003年5月156羽(2,006羽)〔()内は就峙個体数〕。また, 園内での営巣数は1996年~1999年に調べられていて, 1996年は12巣, 1997年は32巣, 1998年は22巣, 1999年は22巣となっている(自然教育園編, 2004)。

本調査期間中において, まず気づいたことは, 1990年代・2000年代に比べ, 日中に滞留するカラスの数が少ないことで, 午前中に実施しているセンサス調査の結果でも, 冬季の最大数が100羽以上(2014年12月12日), 繁殖期では, 2013年5月11日15羽, 7月13日21羽, 2014年5月10日61羽, 6月17日22羽, 7月12日26羽であった。営巣についてはまだきちんと調べていないが, 秋冬期に残った巣を見ると, 外巣は木の枝を組み合わせたこの鳥の本来のものが多いようである。

本種の都市環境下における動植物への影響力は強いので, その集団ねぐら地となっている本園での動向を注視していきたい。

(8) シジュウカラ〔スズメ目シジュウカラ科〕

本種は東京都全域に広く分布している留鳥で, 主に樹洞で営巣し, 巣箱などでも繁殖する。時に人家にある通気孔やポスト, 伏せてある花鉢なども利用する。

本園でもっともポピュラーな鳥で, 調査における出現率は100%である(千羽, 1969)。繁殖期における個体数について, テリトリー・マッピング法による継続的な調査がなされていて, テリトリー数は1961年37個, 1963年33個, 1967年25個, 1969年23個, 1970年23個と高速道路(高速2号目黒線)の完成とともに園の外圍の個体が減少するにともない, 全体としても減少が見られ, 1番いあたりのテリトリーの広さが, 0.8haから1.2haに広がっている(桜井・岡安, 1972)。しかし, 1976年の調査ではテリトリー数が43個と, 1961年の時点に回復しているように推測されるとしている(八木・千羽, 1976)。さらに1999年での同調査では48個とますます増加している(武藤・藤村, 2001)。

本調査期間中の, 2013年4月上~中旬にかけて, 従来と同じ, テリトリー・マッピング法を用いてテリトリー数を調査した。その結果34個を記録した(川内・川内, 2014)。

現在までの調査では, ヒナ連れの家族群の観察は園全体で記録しているが, 営巣自体については未確認で, 繁殖生態の把握はできていない。本園では巣箱の設置はなく, どのような場所で営巣しているのか調べてみたい。また, 生息番い数については, 他所との比較を試みる予定である。

(9) ヒヨドリ〔スズメ目ヒヨドリ科〕

本種は, かつては東京都内では奥多摩地域などの山林で繁殖し, 秋10月初め頃に平地にも飛来し, 冬鳥として生活し, 4月下旬~5月初めごろに飛去する漂鳥であった。しかし, 1960年代後半から平地部でも越冬するようになり, 1970年代には都内全域に分布するようになり, 繁殖も始め, 今では留鳥となっている(川内, 1997)。

本園では, 1970年頃までは10月~翌年5月まで生息する冬鳥であったが, 1974年以後は周年ふつうに生息している。記録によると, 1970~71年の間から毎月見られるようになったが, 初期の出現頻度は低く, 1975年頃に高くなった。留鳥化した原因はわかっていない(千羽, 1978)。1980年以降は周年生息, 夏に幼鳥も見られるが, 園内で繁殖しているかどうかは不明。4月と10月下旬に個体数が急に多くなり, 5月中旬と9月下旬~10月上旬に個体数の減少が見られた。この頃に, 夏季の個体群と冬の個体群の入れ替わりがあるのかもしれないが詳細は不明(小原・坂本・千羽, 1982)。

1990年代には、夏季は少なくなるが10～20羽程度が見られる（千羽・坂本，1992）。

本調査期間中でも、留鳥であり、冬季は個体数が多く、夏季は減少するという傾向は変わらない。また、7・8月に園内で若鳥は見かけるが、営巣については、古巣を含めて把握できていない。

園内でもっともポピュラーな鳥のひとつである本種の巣が見つからないのは、興味あることで、すでに指摘されているが、カラスによる影響の有無などを調べてみる必要がある。

(10) エナガ〔スズメ目エナガ科〕

本種は東京地方では丘陵地～山地の森林地帯に生息し、平地部では冬季にもあまり観察されなかったが、1980年代から多摩地区で個体数が増え、繁殖分布域が広がり、2000年頃には練馬・杉並などの23区内の緑地でも営巣し、2010年頃には明治神宮・新宿御苑などでも繁殖するようになってきた（川内，2014）。

本園では、1960年代と1980年代に1例ずつ観察例があるだけであったが、2001年に落下した巣が、本園名誉研究員の矢野 亮氏によって拾得され、同時期にカワセミ調査用のVTRに2羽が映っているのが確認されている（武藤・千羽，2001）。ただし記録は単発に終わり、それ以後の記録はない。本種の記録は開園時（1949年）における観察リストに載せられていて、また、かつては冬鳥として観察されているので、まったくの初顔ではない。

本調査中で、その生息に注目していたが、2013年3月9日に3羽、翌4月5日には2羽を認め、そのうち1羽はくちばしに巣材らしきものをくわえていた。また2014年6月17日には、複数か所で群れを見かけ、合計13羽を観察し、その中に巣立ちビナ2羽を連れた家族群を認めた。移動性の少ない鳥なので、営巣自体は観察していないが、園内で繁殖したと考えられる。センサス調査でも、2014年5月以降記録される月が多くなっている。近い将来、本園ではコゲラと同じように留鳥となると思われる。

大きな変化がみられている最中なので、本園での動態を今後も追っていく予定である。

(11) メジロ〔スズメ目メジロ科〕

本種は以前から留鳥として東京都内の緑地で繁殖していたが、近年個体数が増えてきて、各地で多数見かけるようになってきた。

本園でも、かつては調査以外の記録も含めると、日周行動地域の一地域として本園を採餌地にする程度と考えられる（千羽，1969）とされていたが、1970年代になると、記録は多いが、時々飛来するのみで、繁殖はしない。1965年当時は高速道路の工事などで、見ることも少なくなったが、1972年頃より再び姿を見せることが多くなった。2～5羽前後の一群のことが多い（千羽晋示，1978）となり、1980年代には、周年見られる。秋から冬にかけて個体数も5～10羽と多くなるが、夏季は少ない。繁殖は未確認であるが、夏季に2～3個体の囀鳴を聞くこともあり、繁殖個体があるのかもしれない（千羽・坂本，1985）と変わってきている。その後1991年5月には、正門付近で、中にヒナがいる巣が見つかり、巣立ちも記録されている（千羽・坂本，1992）。

本調査中も出現率100%で、個体数も2014年7月12日の調査時には102羽を記録している。繁殖についても、路傍植物園で営巣を確認している〔写真3〕。また、園内の路傍植物園で拾得された、2014年に使用と思われる巣〔写真4〕を、本園名誉研究員の矢野 亮氏から提供いただいて、巣材・サイズなどを計測した。巣は碗状に形成され、巣材はシュロの皮（毛）が主体で、表面にはコケ類が



写真3 メジロが営巣したコクサギ・1.5mの高さに巣
2014年5月24日 路傍植物園にて〔撮影：川内 博〕



写真4 メジロの巣〔写真3とは別のもの〕

2015年3月14日 路傍植物園で昨年営巣したと思われる巣〔撮影：川内 博〕

張り付けてあった。巣のサイズは外径 7×6.5 cm, 高さ5.5cm, 内径(産座) 5×4 cm, 深さ4cmで、これは大阪府で採取された同種の巣の数値とほぼ同じである(小海途, 2011)。

いずれにしても、本種は個体数・生息域を広げていることは間違いないようで、その原因を追究したいと思っている。

2. 本園で過去に繁殖記録のある鳥：3目5科5種

(1) コジュケイ〔キジ目キジ科〕

本種は中国大陸原産の外来種で、大正時代に狩猟鳥として移入され、放鳥が繰り返され、本州中北部～九州に広く分布するようになった。しかし、近年東京23区内では生息していないと思われる。

本園では、開園当時（1949年）から繁殖が確認されている。1960年代から減少傾向がみられ、1970年代前半のセンサスでは4～5羽が記録されている（千羽，1978）。1980年代に入ると急激に減り、現時点の調査では1986年6月28日に2羽の記録が最後である（坂本直樹，未発表）。本園での絶滅の原因は、おもに地上で生活する鳥のため、ノネコによる捕食が一番大きいと考えられている（小原・坂本・千羽，1982）。

本調査期間中にも、まったく記録されなかった。

(2) アオバズク〔フクロウ目フクロウ科〕

本種は代表的な夏鳥として、東京都内全域の緑地に渡来・生息し、繁殖をしていた。しかし、1960年代からその生息が減少し、繁殖地が限定されるようになってきた。

本園では、1973年までの5～10月にその鳴き声が確認され、確証はないものの状況から繁殖しているとされていた。しかし、1974年以降は、時々声は聞かれることはあっても、移動の途中に一時的に立ち寄る程度と考えられるようになった（千羽，1978）。

本期間中にも本種は記録されず、また、食痕など本種が生息する可能性のあるような状況も見られなかった。なお、夜間の調査は実施していない。

(3) モズ〔スズメ目モズ科〕

本種は林縁などに営巣する疎林性の鳥で、かつては都内いたるところで繁殖していたが、小型の動物を狩るという食性のため、東京の市街地が都市化し、小動物が見られなくなるとともに数が減っていった。

本園では、1970年代半ばまで、1番い以上の繁殖が確認されている。1980年に入っても繁殖していた可能性が高いが、営巣は確認されていない（千羽・坂本，1992）。1990年以降も10月～4月頃まで、おもに開放的な明るい林に1～2羽が生息している。繁殖しなくなったのは、開放的な明るい地域がなくなりつつあるのが一因かもしれないとされている（千羽・坂本，1992）。

本調査でも状況は同じで、冬場を中心に1～2羽を観察したが、繁殖についての知見は得られなかった。しかし、可能性はあると思われるので調査を継続している。

(4) スズメ〔スズメ目スズメ科〕

本種は東京都内の森林地帯を除く地域に広く分布し、留鳥として多数生息している。

本園では、1960年代には周年生息し、夏季に一部は園内の家屋を利用し繁殖し、多くは園外の人家で繁殖生息するもので、採餌・休息のため園内に飛来する（千羽，1969）。しかし、それ以降園内での繁殖は記録されていず、また、1965年当時は園の外圍地域にしか生息していなかったが、1970年ころからは、中央部にまで侵入するようになった（千羽，1978）。

本期間中の調査でも、園内での繁殖は認めなかった。また、5月～8月にかけては、園内の中央部

でも、幼鳥を含むスズメが採餌していて、センサスでも最大68羽を記録した。本種は最近、人家などに営巣場所である隙間が少なくなり、住宅難に陥っている傾向がある。元来は樹洞に営巣していた種でもあり、従来とは違う形の営巣も考えられるので、繁殖生態面を注視している。

(5) ホオジロ〔スズメ目ホオジロ科〕

本種は平地から低山帯の雑木林やその林縁、畑の周りのやぶ等に生息する鳥で、東京23区内では、公園などに生息していたが、1960年代には繁殖する場所は限定されるようになった。

本園では、1970代半ばまで武蔵野植物教材園で繁殖が記録されたが、1980年代には3月中旬頃と11月中旬頃に見られる程度である。原因としては生息環境として森林化が進んだためかもしれないとされている(千羽・坂本, 1985)。1990年代には冬季を中心に水生植物園でまれに見られる程度である(武藤, 2001)。

本調査期間中に、本種の生息を認めていない。

3. 今後の繁殖に注目している鳥：5目12科12種

(1) オオタカ〔タカ目タカ科〕

本種は森林に生息する猛禽類で、現在準絶滅危惧に指定され、その保護が必要とされるくらいに減少している。しかし、近年関東地方では生息・繁殖が増えて、皇居や明治神宮などの都市緑地でも継続的に繁殖するようになっている(柳沢・川内, 2013)。

本園では、かつては上空を通過する稀な鳥として記録されていたが、1990年代になると、冬季に多く見られ、ドバト、キジバト、ハシブトガラスなどを捕食している。観察されるのは雌の幼鳥が多いとされている(武藤, 2001)。

本調査期間中でも、1月～3月にかけて観察されている。個体数は1羽で、カラスの群れに追われているのを見ることが多い。都内各地の緑地での状況から、本園で繁殖する可能性はあるので、今後注目していきたい。

(2) アオゲラ〔キツツキ目キツツキ科〕

本種は中型のキツツキで、平地林に生木に巣穴を掘るため、以前から都内各地で営巣が確認されている。23区内でも単発的に記録されていて、明治神宮では、御苑内に巣穴を掘り、繁殖活動をした例がある(柳沢・川内, 2013)。

本園では、以前から冬季にアカゲラが飛来・生息する例はあるが、アオゲラの記録はきわめて少ない(千羽, 1969)。その後も1980年1月～1993年12月までの間に、毎週のようにセンサスが実施されているが本種の記録はない(坂本直樹, 未発表)。

本調査期間中の2014年8月8日に1羽の鳴声を聞いた。また、翌9月13日には1羽を目撃した。また、2015年2月6日にも本種と確認できなかったが声を聞いた。さらに、本稿執筆後の4月16日に雌1羽と別個体1羽の2羽を確認、また、5月17日に1羽、5月30日に雄1羽と別個体1羽の2羽を確認した。繁殖の可能性があるので、調査中である。

(3) ツバメ〔スズメ目ツバメ科〕

本種は夏鳥として全国に渡来し、人家での営巣が知られている。また、いずれの地でも減少傾向がみられている。

本園では、以前から4月～9月に、水生植物園、湿地などを中心に採餌しているのが観察されているが、営巣は記録されていない。

本調査期間中も、5月～9月に園内で飛ぶ姿を確認したが、営巣は見かけていない。園外の目黒通り沿いのマンション1階の駐車場の天井壁面で営巣していた。

(4) ハクセキレイ〔スズメ目セキレイ科〕

本種は関東地方においては冬鳥とされていたが、1970年頃から夏季にも見られるようになり、現在は各地で繁殖する留鳥となっている。

本園では、1960年代までは稀な旅鳥とされている(千羽, 1969)。しかし、1970年半ば頃から観察されることが増え、1980年代になると、冬期に1～2羽を見ることが多くなり、夏季にも稀に飛来するようになり、6月に幼鳥1羽が観察されている(千羽・坂本, 1992)。

本調査期間中は、毎年主に11月～12月に1羽観察する程度で、繁殖に関する情報は得られなかった。近隣で繁殖する可能性も高いので、今後の動向に注意していきたい。

(5) オナガ〔スズメ目カラス科〕

本種は東京都内の丘陵地から平地にかけて広く分布し、都心部にも留鳥としてふつうに生息する。ただし地域的に偏りや個体数の増減などが見られている。

本園では、1970～1971年頃より増加の傾向を見せていて、日中行動の一地域として飛来するが生活の本拠としていない(千羽, 1978)。周年見られるが、園内を移動しながら採餌や休息している個体が多い。とくに正門付近、事務所跡地付近、水鳥の沼付近に多く見られる(千羽・坂本, 1992)。

本調査期間中も、本種の生息は園の外周付近に限定されていて、行動圏の一つとして利用しているように見えた。現在園内では繁殖はしていないが、近隣で営巣していると思われるので、園内での動向に注意していきたい。

(6) ムクドリ〔スズメ目ムクドリ科〕

本種は東京都内全域に広く分布し、留鳥として多数生息し、人家や建造物内で繁殖をしている。

本園では、1960年代は周年出現するが、真の留鳥ではなく、日中採餌に飛来するのみで繁殖は確認していない(千羽, 1969)。かつては大群(300羽)がやってきたが、1974年頃から急激に減少した。その原因は、本種が当園に飛来するのは採餌と休息のためで、ねぐらや繁殖地としても利用していない。従って、周辺地域で繁殖したものが飛来してきたもので、自然教育園がムクドリの生息に不適當となったのではなく、外圍環境の変化が本種の減少をもたらしたものと分析されている(千羽, 1978)。1980年代になると、前ほど個体数も多くなり、飛来の頻度も低くなっている(小原・坂本・千羽, 1982)。さらに1990年代になると、見られることの少なくなった鳥の一つである。6月～8月頃に若鳥をまじえた群れ(30羽程度)、9月から10月頃に50羽程度の群れを見ることができるようになっている(千羽・坂本, 1992)。

本調査期間中も、センサス記録は2回しかなく、定着はしていない。本種は、現在生息個体数を増

やしている猛禽類（オオタカ・ツミ・チョウゲンボウ）の格好の餌となっている可能性が高い。そういう面での視点でも調査したい。

(7) ヤマガラ〔スズメ目シジュウカラ科〕

本種は森林性の鳥として、東京都内の山地～丘陵地にかけて広く分布し、留鳥として緑地に生息している。しかし、現在東京 23 区内で繁殖している緑地は、皇居・明治神宮など限られた場所である。

本園では、1960 年代は頻度高く出現していたようだが、1970 年代になると時折飛来する程度（千羽、1978）。その後も、冬季を中心に少数見られていたが、1999 年には繁殖期にも生息が記録されている（武藤、2001）。しかし、本園での繁殖は知られていない。

本調査期間中も、秋冬期に出現し、最大 6 羽を記録したが、繁殖の兆候は見られなかった。明治神宮では過去 40 年間の間で、その個体数が 5 倍に増えている（柳沢・川内、2013）。同じような環境の本園で、いまだに定着していない理由を追及していきま。

(8) ウグイス〔スズメ目ウグイス科〕

本種は東京都内ではおもに丘陵地～山地にかけて繁殖し、平地部には冬鳥として飛来する。ただし、近年多摩地区での越夏が多数見られていて、繁殖していると思われる。

本園では、基本的には冬鳥として分類されるが、6～8 月以外は複数生息し、また、夏季にもしばしば見られることがある（千羽・坂本、1985）。

本調査中には、とくに営巣をしている兆候は見られなかったが、かつては明治神宮などでも繁殖していた記録があるなど、本園を含め、繁殖地の変化には注意をしている種である。

(9) カワラヒワ〔スズメ目アトリ科〕

本種は東京都内全域に広く分布し、留鳥として各地に生息する。

本園では、1970 年代は 1～4 羽くらいが毎月頻度高く見られるが、個体数が少なく、当園の食物連鎖の上からは重要度が低いと考えられるとされている（千羽、1978）。また、1990 年頃は周年生息し、10 月～12 月には個体数も多くなる。1975 年当時に比べると多くなっている。繁殖しているものと思われるが確認はない（千羽・坂本、1992）。

本調査期間中も、傾向はいままでと同じで、冬季に最大 20 羽程度を記録しただけで、繁殖期には認めていない。周辺の街路樹や庭園などに営巣・繁殖している可能性はある。

(10) ドバト（カワラバト）〔ハト目ハト科〕

本種はカワラバトを原種とした家禽で、伝書バト・レースバトとして野外に出たものが、そのまま生活をしている鳥で、本来の野鳥ではない。しかし、市街地を中心に相当数生息し、その存在は無視できない状態である。

本園では、通年見られるが、園内では多くなく、園外に多数生息する（武藤、2001）。

本調査期間中も、園内で見かけることは少なく、繁殖は記録していない。しかし隣接する区立白金台どんぐり児童遊園付近には、40 羽程度が給餌を求めて常駐する。

本種もムクドリと同じように、猛禽類の餌となっていることが多い。そんな面も含めて、今後の動向を注視している。

(11) ワカケホンセイ (ホンセイインコ) [オウム目インコ科]

本種は、東南アジア～インドにかけて分布する鳥で、日本へはペット用に輸入され、1960年代末に業者のもとから大量に逃げ出したのが元となっている(川内, 1997)。その後、1000～1500羽が、大田区内で集団ねぐらをとるようになり、各地で繁殖するようになっている。

本園では、主に夕方上空を通過するものが観察され、園内に降りてくるのは稀であるとされている(武藤, 2001)。

本調査期間中も同様に、上空通過が多いが、園内の木に止まるものも観察している。樹洞に営巣する鳥なので、樹洞の多い本園で繁殖する可能性があるため、その動向を注視している。

(12) ソウシチョウ [スズメ目チメドリ科]

本種は中国～インドにかけて分布する鳥で、日本へは観賞用・糞の利用などで大量に輸入されていた。その籠脱け、放鳥などで野外で自活するようになっている。

本園では、2000年9月に入園者によって写真撮影され、記録された。

本調査期間中には記録しなかった。本種はガビチョウなどとともに在来種への影響が考えられ、特定外来種に指定されている。今後生息する可能性があるため、注視している。

考 察

今回の調査によって、21世紀に入ってからの本園の鳥相の一部が明らかになったといえる。とくに、コゲラ・エナガなどの森林性の鳥類の定着が目でき、明治神宮などとともに、緑地の森林度が高くないということが明らかになってきた。しかし、明治神宮には造成以来繁殖し、さらに増加している森林性の鳥・ヤマガラがまったく定着しないのは不思議である。面積、樹種の違いなどを検証していきたい。

また、カワセミの繁殖地として、断続的だが継続されているのは注目すべきことで、大都会の中心部に存在するだけに意義が高い。他の場所の事例も調べ、比較・検討していきたい。

今回繁殖に関して調査を実施していて、本調査レベルでは確実な繁殖記録(営巣・給餌活動・巣立ちビナの確認など)が得にくいことがわかった。過去の本園の調査のように、常駐する研究者が日々園内を回りながらチェックするのと違い、調査に携われる絶対時間が少なく、情報量が少ないのである。そのため、今回の報告は不備な点が多く、未検討の箇所も各所に残っている。今後も調査を継続していくとともに、多面的に情報を得て、本研究を推進していきたい。

しかし、本レベルの調査でも、ヒヨドリ・コゲラ・エナガのように、短期間で従来の生態と異なる状態を示すことも多い昨今、一定期間ごとにきちんと記録を残しておくことは重要である。また、今回のようにまとめることによって、明治神宮・皇居・東宮御所など、同地域の緑地での調査記録とあわせて、都心部の鳥相を検証することができる。さらに、本調査を推進していけば、過去からの詳細な調査がなされているイギリスの首都であるロンドンとの意義のある比較研究も可能と思われる。

謝 辞

調査にあたっては、国立科学博物館附属自然教育園のご理解と、同園名誉研究員の矢野 亮氏のご

支援, また, 同園の大澤陽一郎氏, 所 真次氏, 久永美津子氏のご協力に厚くお礼を申し上げたい。

引用文献

- 千羽晋示. 1969. 自然教育園の鳥類群集について. 自然教育園報告, (1): 1-13.
- 千羽晋示. 1978. 自然教育園の鳥類について. 自然教育園報告, (8): 75-106.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1981. 自然教育園の鳥類について. 新たに記録された鳥類などの追加. 自然教育園報告, (12): 121-123.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1985. 自然教育園の鳥類の記録 (1982 ~ 1984). 自然教育園報告, (16): 75-82.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1989. 自然教育園の鳥類の記録 (1985 ~ 1988). 自然教育園報告, (20): 15-19.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1992. 自然教育園の鳥類の記録 (1988 ~ 1991). 自然教育園報告, (23): 1-9.
- 岩出 隆. 2014. 自然教育園におけるカルガモ繁殖の撮影記録 (2013年). 自然教育園報告, (45): 73-79.
- 川内 博. 1997. 大都会を生きる野鳥たち. 地人書館. 245pp. 東京.
- 川内 博. 2000. 都会に生息するキツキ類. バーダー, 14 (9): 12-19
- 川内 博. 2008. たくましく子育てする都会のカワセミ. 私たちの自然, 49 (7): 14-15.
- 川内 博・大塚豊. 2013. 自然教育園における 2010 年代の調査開始時の状況と今後の展開. 自然教育園報告, (44): 1-7.
- 川内 博・川内桂子. 2014. 自然教育園におけるシジユウカラの繁殖期の個体数について(2013年度). 自然教育園報告, (45): 41-46.
- 川内 博. 2014. 東京地方におけるエナガの生態変化について・1. URBAN BIRDS, 31: 31-35.
- 小海途銀次郎・和田 岳. 2011. 日本 鳥の巣図鑑. 391pp. 東海大学出版会. 神奈川.
- 国立科学博物館附属自然教育園編. 2004. 都市に生息するカラス類と人間との共存の方策の研究 (平成 12 年度 ~ 15 年度). 188pp. 東京.
- 国立科学博物館附属自然教育園編. 2014. 国立科学博物館附属自然教育園ガイドブック. 30pp. 東京.
- 武藤幹生. 2001. 自然教育園の鳥類の種構成について. 自然教育園報告, (33): 153-166.
- 武藤幹生・千羽晋示. 2001. 自然教育園における繁殖鳥類の変動. 自然教育園報告, (33): 379-381.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 438pp. 日本鳥学会. 兵庫.
- 小原伸一・坂本直樹・千羽晋示. 1982. 自然教育園の鳥類について(1979 ~ 1981年). 自然教育園報告, (13): 13-26.
- 高野伸二・柳澤紀夫. 1970. 明治神宮の鳥類について. 明治神宮境内総合調査報告: 243-265.
- 東京都. 1974. 東京都産鳥類目録 昭和 49 年度版. 223pp. 東京.
- 渡邊昭廣. 2014. 自然教育園 (2013年) 鳥の撮影記録. 自然教育園報告, (45): 81-90.
- 矢野 亮. 1996. 帰ってきたカワセミ. 地人書館. 174pp. 東京.
- 矢野 亮・大澤陽一郎・奥津 励・桑原香弥美. 2005. 自然教育園におけるブルーギル・オオクチバスの密放流から駆除まで. 自然教育園報告, (36): 9-20.
- 矢野 亮. 2009. カワセミの子育て 自然教育園での繁殖生態と保護飼育. 地人書館. 218pp. 東京.
- 柳澤紀夫・川内 博. 2013. 明治神宮の鳥類 第 2 報. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書: 166-221. 東京.